

氏名(本籍)	権	五	鳳	(韓国)
学位の種類	文学	博士		
学位記番号	博乙	第298号		
学位授与年月日	昭和61年	3月25日		
学位授与の要件	学位規則	第5条第2項	該当	
審査研究科	哲学・思想	研究科		
学位論文題目	李退溪研究—家書を通して見た李退溪の人間像と思想—			
主査	筑波大学教授	文学博士	高橋	進
副査	筑波大学教授	文学博士	湯浅	泰雄
副査	筑波大学助教授		奈良	博順
副査	筑波大学教授	文学博士	長瀬	守
副査	筑波大学教授	文学博士	内山	知也

論文の要旨

本論文は、李退溪が家門の人々に与えた全家書の内容を網羅的に分析精査し、もって李退溪の人間像を明らかにするとともに、彼の日常生活における修己、儒者としての齊家、郷土生活と社会改造運動、人材養成(教育)、儒学の研究集成事業、政治活動等について、その背景になっている思想を、家書にあらわれた事実関係を通して究明したものである。論文全体の構成は、序論および本論6章(全22節)と結論とから成り、末尾に「退溪家年表」を付し、400字詰原稿用紙1390余枚に及ぶ。

序論は、本研究の目的および意義、研究方法等を述べる。著者はまず、従来の李退溪研究が主として彼の哲学思想、書院教育、文学等に限られており、彼の日常生活、齊家、郷土生活等々の身辺をめぐる諸実態の解明に及ばず、特に退溪が重視した書簡のうち、家書については全く研究資料から度外視されてきたことを指摘し、本研究の意義を明らかにする。

研究方法は、まず退溪全書、陶山全書と鶴川遺稿に集録されている890篇の全家書を整理し、他の関連文献と対照検討して、家書の内容を確認し、伝言故事は、退溪の子孫・姻戚の後裔に面接して収集し、家書にあらわれる地方を実地踏査して事実究明の典拠としたのち、これらの作業結果を退溪年譜に照らして年次別索引を作り、別に整理した退溪家の各種年表を合わせて、新たに退溪家の年表を完成して論述に臨んだとしている。論文の構成方法は、儒家の經典に基づき、修身、齊家

(治家と教育)、治国(郷土生活と国家への奉仕)に従い、従来未開拓の退溪の齊家と郷土生活および退溪の「吾事」に重点をおいて考察し、もって退溪の人間像と思想とを明らかにしたという。

第一章「退溪家書の概観」では、家書の性格、出典と篇数を明らかにし、次いで家書の歴年別篇数、内容別の分析と整理、書簡と家書の寄与と修答の比率、重複登載等の分析を行い、結果として、退溪家書が彼の人間像や学問思想の背景を把握するのに不可欠の有効資料であることを確認する。

第二章「居家律身の道」では、特に退溪の品性が好学端重であり、立志と篤行をもって齊肅(恭謹、清泊、静黙、好善、公正、通明、忠直)な人格を形成したこと、次いで、退溪の病氣辞免は口実でなく、吐血するほどの重病を患っていたこと、その病弱を克服して長寿を保ったのは、彼の医学知識と独自の体操等による涵養にあったことを解明し、さらに通説では、退溪の自修の特質を「持敬克己を目指した存養省察」にありとするが、具体的には「寡欲と静虚」による治心に基本がおかれていたことを、資料を精査して論証する。

第三章「治家経済と礼制立言」では、彼の齊家の基本理念は、「大義と恩恵」であったと論結し、事兄、祖先祭祀に孝誠を尽くし、親族の敬愛と敦睦に努め、平等に家人を処遇し、夫婦生活を尊重したこと、非儒家的習俗を禁止し、節約と貯蓄(儲物)を厳しく教え、恩義、廉潔、救恤を齊家の基本精神としたこと、また、退溪の経済思想は、殖利を慎しみ、富財は天に俟つという点にあり、ために彼の生活は苦しく、貧寒な在京生活を送った事実、その一方で、他人の水田に農水を譲るため自己の田圃は畑に変える等、隣人愛を旨とする行動をとった事実等を解明する。また退溪の礼説は、伝統の古礼と俗礼に基づく独自のもので、朝鮮中期の礼制創設者として位置づけられることを論証する。

第四章「家人教育」では、まずその対象と教育の概観をしたのち、家人教育の内容、挙業出仕について述べる。著者は資料に基づき、家門の88人を退溪が教育したことを探索し、教育内容は生活の法度と言行の謹慎を旨としたこと、学問には立志を最緊要とし、「不進則退」をもって篤学を奨励したこと、教育課程を五期に分けて教育したこと、科挙の受験を認めつつも本質的学問とは認めず、出仕には消極的であり、出仕後の就職栄進を戒めたことを詳細に解明している。

第五章「処郷教化」では、退溪が郷土礼安を、生活の基盤、学問の道場、教育の改革、政治の実験並びに研究の場と定め、彼の郷土生活を通じて行った郷村社会の改造と教化の諸活動を網羅的に究明している。退溪は、「一切敬之」「各在当人之舟」を基本思想とする郷民平等、人間尊重の精神を具体的に実現し、道義と法治に基づく郷村生活を奨励して自ら範を示すとともに、郷民と協力して社会改善に努めたこと、郷約実施の前にまず族契(温溪族契)を実験的にを行い、郷民の要請に応じて郷立約条を制したが、政府権力による治民よりも、教育による人心教化を期待して自治主義政治思想の実現に努めたこと、書堂を開いて人材を養成し、学問中心の私学を発展させて公学(文章学と科挙準備学問)の弊風を破る教育運動を行い、自己の教学思想を陶山書堂で成就させることに努めたこと等々を詳論する。

第六章「出仕進退と成徳治世」では、退溪の成就した学・徳・道と治世に貢献した生涯の業績とその理想とを資料に基づき事実在即して総合的に詳論する。特に本章では、退溪が「吾事」「我平生

事」「吾業」と頻用した内容とは、学問と教育であり、郷土での生活実践による言行の垂範を通して学問を普及し、徳治と社会の倫理秩序を正し、居に安じて天に従い、人心を敬する世に導くことであったこと、故に彼が「吾事」に懸命で、在京権力の座に恋々とするのを嫌ったのは、虚名と重病で高官に居るを不議と愧じ、政界浄化を自ら実践したものであること、中央官・地方官として、一貫した政治姿勢を保持し、誠意と忠実に基づく「居官の道」を明確に打ち出し、これを実践したこと、時君に啓陳した政治思想の中心は、天人和合に基づく徳治の実現と、対外平和を維持する点にあったこと、『聖学十図』の制進、印行、普及の過程を通じて、退溪の愛国憂患の思想がみられたことを詳論する。

結論は、以上の広汎多岐にわたる論述を 50 枚を費して要約再構成し、本論文の成果と主旨を明らかにしている。

審 査 の 要 旨

従来、東洋では、思想家・文人等の家書は、当人の思想や文学の内容を直接且つ具体的に解明し、あるいは表出された思想・文学の内容の裏付けや背景を究明するために必要不可欠の資料と目されてきた。然る所、先行の李退溪研究が主として哲学思想、書院教育、文学の面に限られていたのに対して、本論文は、退溪の遺した 900 篇に近い家書および関連資料の網羅的な分析精察を通して、退溪の人間像と思想的背景を究明したもので、かかる研究は、内外に未だその例を見ることなく、学界に貢献するところ極めて大である。

具体的にいえば、退溪関係資料に録された書札類は 2000 篇に達するが、著者は、その中から家書を選び出しながら退溪家門の新旧族譜によって家書に該当する人物を割り出し、書簡の字と本名とを照合し、その間柄の究明、生卒年、行跡、墓所、姻戚関係等を探索し、別に「李退溪家書集」を編集したこと、また、本論文作成に当って、家書および関係資料の分析精査のほか、実地の踏査、伝言故事収集のための退溪子孫および姻戚の後裔数十人との面接を行って、事実究明の典拠としたこと、李退溪年譜の錯誤を修正し、これに退溪家門の人々の生卒・行事等を補充して新たに総合的な「退溪家年表」を作成、本論文末尾に付したこと、これらの基礎的作業だけでも多大の時間と労力とを要するもので、著者の長年にわたる精励がなければ、本論文の如きは完成されなかったであろう。

個々の研究内容としては、次の諸点が注目される。第一に、資料の分析考察に当っては、多くの統計的処理を施し、事実関係を判明ならしめていること、第二に、論述はすべて具体的資料に即して克明になされ、まず事実関係を明らかにして退溪の人間像や思想傾向の解明に努め、憶断や推論をできるだけ排していること、第三に、退溪が立志と篤行により、好学端重な人格形成に努め、また、克己と居敬によって究理体認の実をあげたことを明らかにしたこと、第四に、彼の存養省察論は、具体的には「寡欲と静居」の心法に基本があり、これをもって日常生活を律し、思想形成をし

たとしていること、第五に、退溪齊家の基本精神を恩義・廉潔・救恤にありとし、家政の具体的な方針と実践状況を究明し、また、その経済生活の根本思想は、殖利を慎しみ、富財は天に俟つとする点にあったことを事実即して論証したこと、第六に、退溪は伝統的古礼と族礼を取捨して独自の礼説を講じ、朝鮮中期の礼制創設者として位置づけられることを論証したこと、第七に、郷土礼安における退溪の生活実態を精察し、彼が儒教的道義の確立と社会改善に努めたこと、郷立約条件制定前に族契を定めて実験した事実を初めて明らかにし、また、それらの内容と基本思想とを明らかにしたこと、および退溪の「吾事」の内容を考察し、その学問的・思想的・社会的意義を究明したこと、等々である。これらの諸点とその論述内容、知見等は、本論文における特に注目すべき学術的成果である。

他方、著者は本論文において、全体的に李退溪の人間像・思想等の把握に関し、やや理想化し過ぎた傾向があり、さらに資料の克明な解析によって、彼の人間的な陰の部分や苦悩する部分を浮き彫りにすれば、一層豊かな論述となり得たであろうと思われる。また、退溪の生活や行動の実態と彼の哲学思想との有機的関連性をさらに詳細に明確にすること、家書の背景にある歴史的事象、当時の社会状況等との比較検討を試みること、家書の内容を思想的・歴史的・文学的等に分類し直して整理すること、あるいは年代順に整理すること等によって、一層客観的な論述を目指すこと、等が考えられるが、これらについては望蜀の感なきにしもあらずで、むしろ著者の今後の研究に俟つというべきであろう。

以上、これを要するに、本論文は多少の不備もあるが、全体として李退溪研究に顕著にして特色ある業績を印したもので、学界に貢献するところが少なくないものと認められる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。